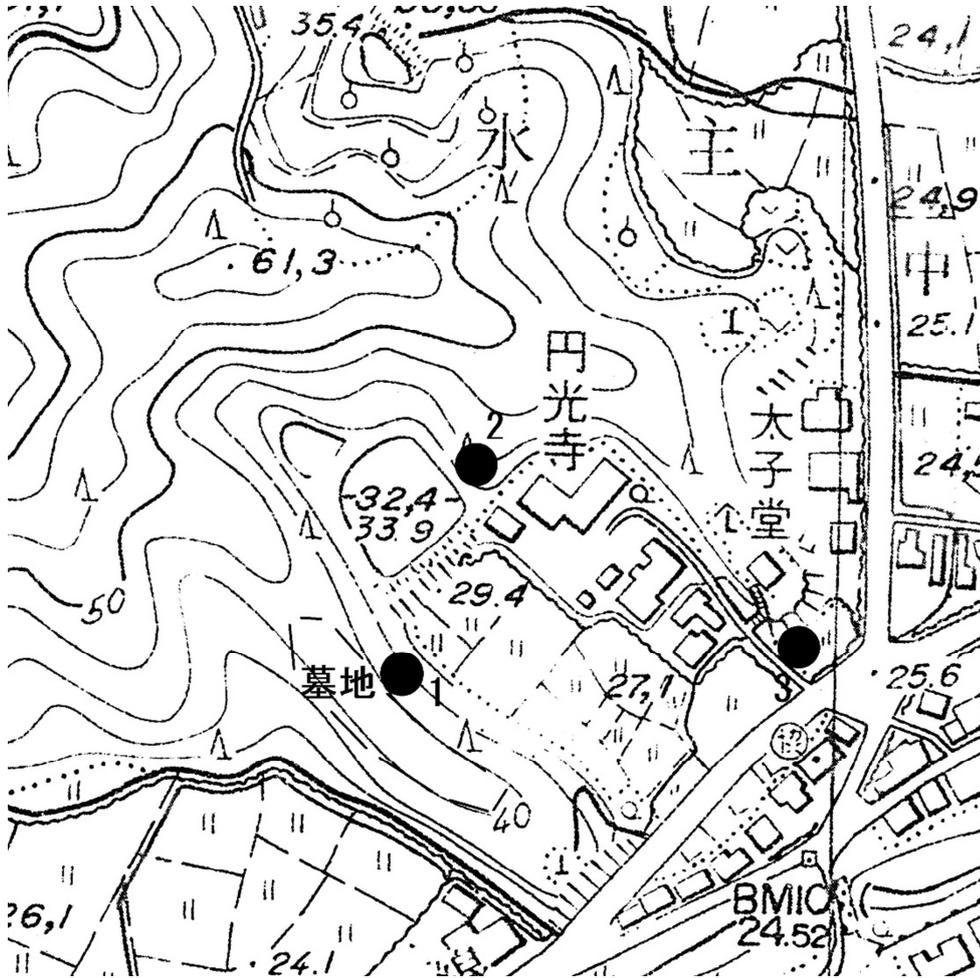


円光寺における中世後半～近世前半期の墓地

東かがわ歴史研究会



はじめに

平成 22 年 (2010)、東かがわ歴史研究会のメンバーにより東かがわ市水主に所在する円光寺付近において中世瓦が採集された。これを契機として現地の状況を把握するために平成 26 年 (2014) 5 月 18 日に現地踏査を実施し、山裾に多数の中世瓦が散布していることを確認し、そのいくつかについて採集した。採集した中世瓦は『東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要』第 12 号～14 号 (2015～2017 年) で資料紹介をした。一

第 1 図 今回の調査墓地(1)と歴代住職墓

2・・A 地点 3・・B 地点

連の調査・整理において判明した重要点は文字瓦の発見で、丸瓦に「住持良咩」、「口葺 願主盛政 五十七歳」、「算全 家政」の銘が刻まれていた。願主盛政は文安元年 (1444) の『大水主社神人座配之事』に見られる「惣官源盛政」、水主神社『内陣大般若経』修復の『文安二年奉加帳』に見られる「水主三郎左衛門尉源盛政」と同一人物の可能性が指摘でき、15 世紀段階の円光寺住職、水主氏の人物が判明する貴重な資料となった。中世瓦の形態的な検討からは 15 世紀前半段階と後半段階の 2 時期に渡る瓦が確認できる点を指摘した。

その後、東かがわ市歴史研究会のメンバーにより、中世瓦片を採集した地点よりもやや上位の丘陵傾斜面において墓石が並べられていることが確認された。現地は竹が繁茂しており、墓石の詳細を把握することが困難な状態にあったことから、令和 5 年 (2023) 3 月 11 日、4 月 22 日に東かがわ歴史研究会のメンバーで清掃し、現状を把握するための調査を実施した。

調査に参加したメンバーは以下のとおりである。

植田泰生、尾崎賢多、尾崎由馬、木村守、津守良一、富山時数、松田朝由、水野惇(50音順)

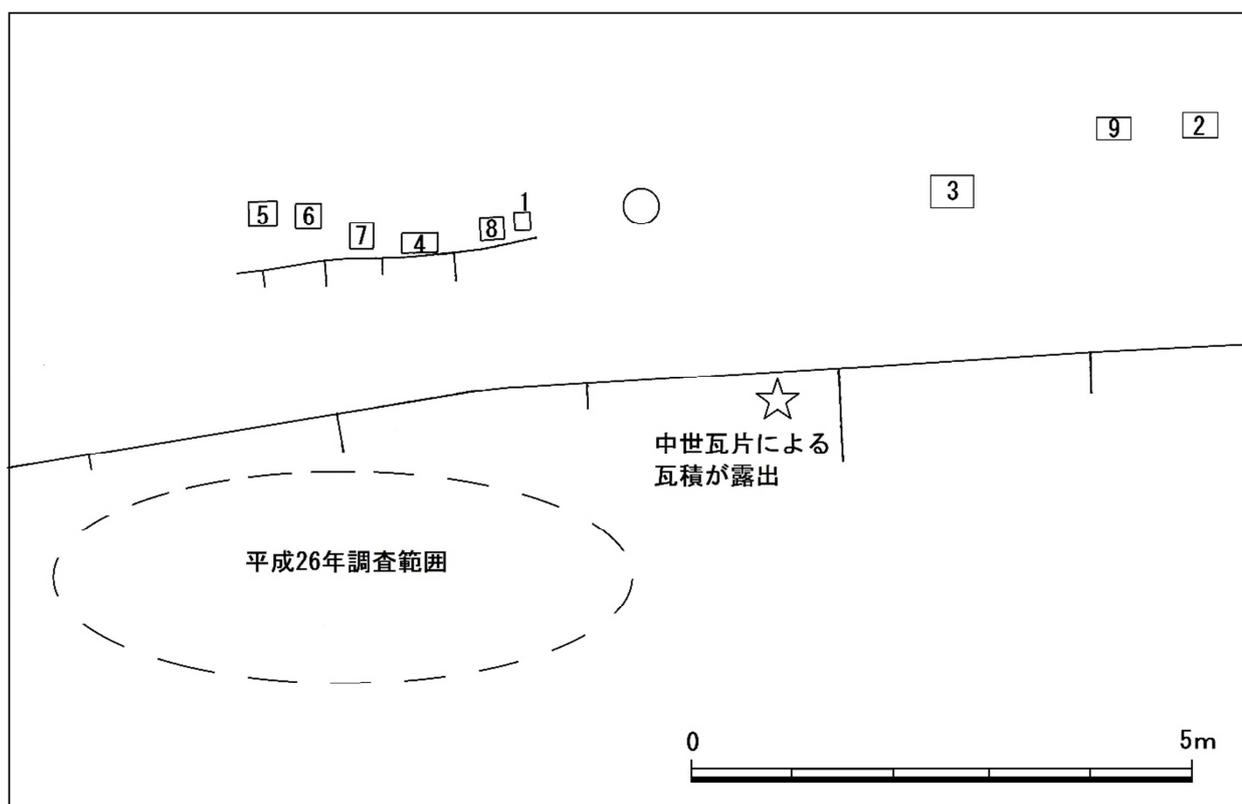
本稿は、この2日間の調査によって判明した点を指摘することを目的とする。

1. 円光寺について

嶺松山蓮華院円光寺は東かがわ市水主中村に所在する真言宗善通寺派の寺院である。本尊は阿彌陀如来像である。開基は沙門良毫(初代)で(梶原 1853)、2代良竜が諸堂を建立したと伝わる。4代定全は『水主神社外陣大般若経』の大願主・執筆者で応永 32 年(1425)～永享 4 年(1432)に書写を実施している。この時に円光寺は書写場所となっており、書写事業の中心的な位置を占めていた(東かがわ市歴史民俗資料館 2005)。5代良正は文明 12 年(1480)の水主神社棟札に名を見ることができる。近世にまとめられた『御領分中寺々由来之書』によると円光寺は虚空蔵院末寺で開基が増伴、寛永年間に再興されたとある。本尊の阿彌陀如来像は恵心僧都の作と伝わっているが、厨子の棟札によると元禄 6 年(1693)に住持快正が願主となって京都の大仏師能勢権之丞が製作したものである(大川郡誌編纂会 1926)。本堂は棟札によると宝暦 2 年(1752)の建立で、大工は備前国実末庄太郎家久である(大内町史編さん委員会 1985)。

2. 中世瓦散布地と今回確認された墓地について

円光寺は古くから古瓦の存在が指摘されていた。『大川郡誌』には「時々境外ノ田ヨリ頑丈ナル古瓦ヲ発掘スル」と記載されている。『誉水村誌』には境内が元々現在地の南から東に接してあっ



第 2 図 今回の調査墓地と平成 26 年調査範囲

たと指摘され、旧寺地から鎌倉・室町時代の様式の瓦の出土することが記載されている。そして完形の軒丸瓦の写真が掲載されている(誉水町史 1972)。『誉水村誌』で旧寺地とされた現円光寺境内の南の谷部は過去の区画整理事業において多量の瓦が出土したと伝わる。現在において中世瓦の散布が確認できるはこの谷部の西側の山裾である。山裾は南北に展開するが広域に瓦片が確認できる。

平成 26 年に調査した地点は西側山裾の北半部である。この調査では多数の中世瓦片とともに砂岩製五輪塔水輪を採集していたが、東かがわ歴史研究会のメンバーにより令和 3 年(2021)頃に調査地の上位で石造物が認められることが指摘された。そこで実態を把握するために令和 5 年(2023)3 月 11 日に東かがわ歴史研究会のメンバーにより現地での清掃作業を実施した。結果、尾根斜面部に設定された南北方向のテラスに中世から近世にかけての石造物(墓石)を確認し墓地の所在することが明らかとなった。

墓地は山裾から 2.5~3m 上位に成形された南北方向のテラスである。墓地のテラスは南北約 15 m、東西約 3m で 9 基程度の石塔が横並びに安置されている。確認できる石塔は火山石製宝篋印塔 1 基、豊島型五輪塔 3 基程度、火山石製ラントウ 4 基程度、砂岩製五輪塔 1 基である。以下では石塔群について年代的に古い順に整理する。なお、石塔番号は第 2 図の番号に対応している。

3. 石塔群について

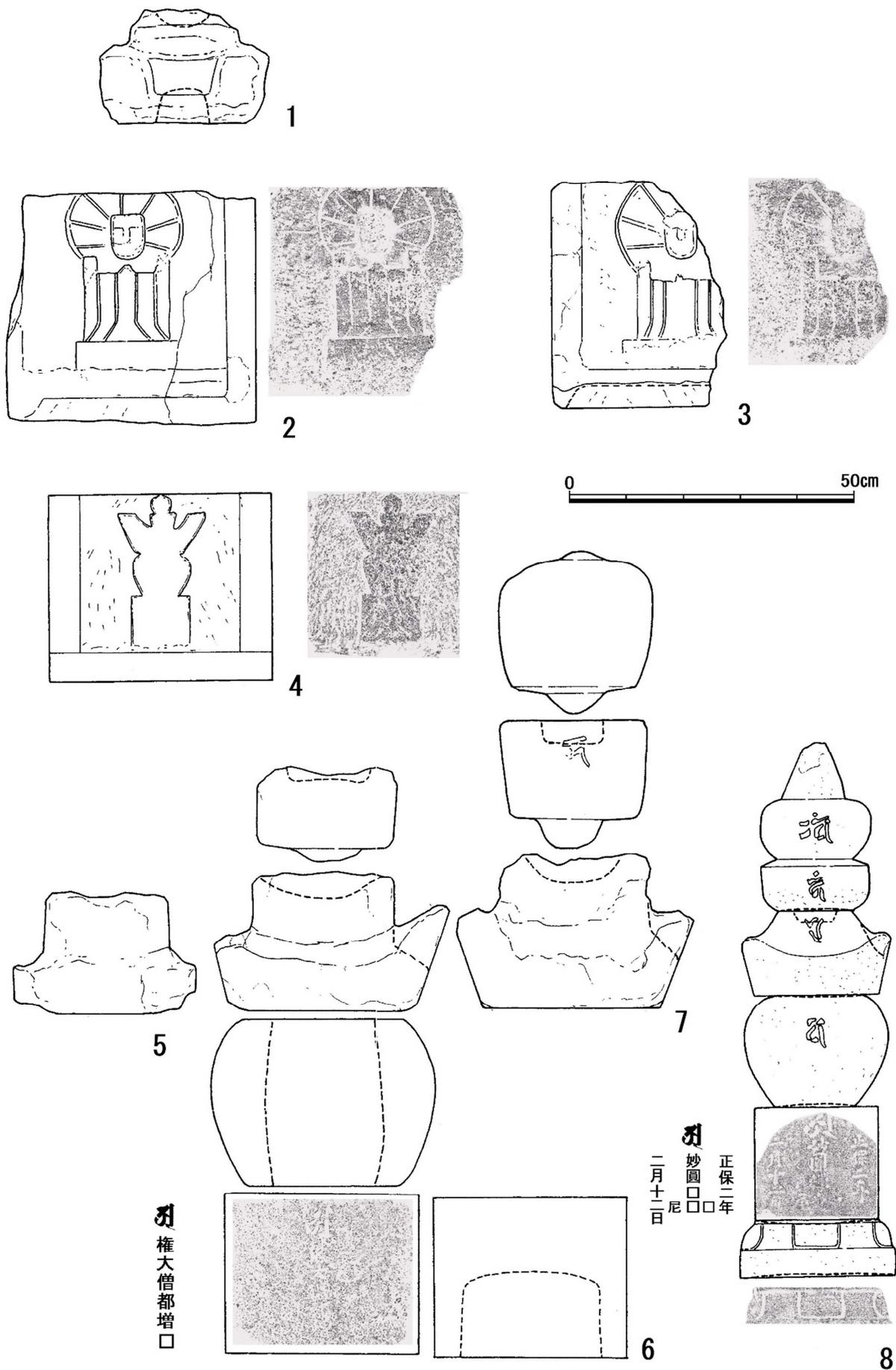
1 はさぬき市大川町と津田町の境に位置する火山の中腹で採石される凝灰岩、いわゆる火山石製の宝篋印塔笠部である。高さ 20 cm、幅 30 cm の小型で、軒下段形が 1 段、軒上段形が 3~4 段と省略されている。また、軒上段形の最下段形は縦長で隅飾り上端部はこの上端にとりついている。隅飾り幅と隅飾り間の幅は等しく約 10 cm である。上下端部にはホゾ孔を設けている。こうした形態的特徴から 16 世紀代の造立年代が指摘できる。

2 は豊島石製ラントウの龕部である。高さ 40 cm、幅 45 cm で奥壁に 1 体の石仏が陽刻されている。石仏は陽刻の基壇上に表現された立像で、高さ 26 cm、幅 20.5 cm である。頭部は上端を平坦に表現し、頭部周囲には直径 20 cm の光背を線刻で表現し、頭部から放射状に直線を刻む。両手は胸前で合掌している。法衣は線刻で表現されている。

3 は豊島石製ラントウの龕部である。高さ 40 cm、幅 45 cm に復元でき、2 と同法量である。奥壁には 1 体の石仏が陽刻されており、石仏のモチーフも 2 に類似する。よって、2・3 は 1 対として造立された可能性が推測される。1 対から想起されるのは夫婦の供養塔である。奥壁に石仏を刻む豊島石製ラントウは 1600~1620 年頃に確認でき、2・3 も同時期の 17 世紀初頭に造立された可能性が推測される。

4 も豊島石製ラントウの龕部である。高さ 33 cm、幅 39 cm で 2・3 よりも規模は小さい。奥壁には豊島型五輪塔を 1 基陽刻している。この豊島型五輪塔のモチーフは寛永年間(1624~1644 年)の豊島石製ラントウに一般的なモチーフであり、年代的には寛永年間の 17 世紀前半期が想定できる。

5 は豊島型五輪塔火輪である。高さ 21 cm、幅 33 cm で屋根は方形、四隅の突起は欠失している。法量は 15~16 世紀の中世石造物に近く、中世的な色彩を留めた事例と評価したい。年代は寛永



第3図 今回の調査墓地の石塔の実測図

年間頃が想定される。

6は散在していた残欠を今回組み合わせて復元したが、本来の組み合わせと断定はできない。法量は高さ25cm、幅42cmで火輪は明瞭に突出する。寛永年間の年代が想定できる。水輪は内部を空洞にしている。地輪は高さ28cm、幅34cmである。下端部を深さ15cm削り込んでいる。正面には銘文が認められ、胎蔵界大日如来種子の下に「権大僧都増口」とある。僧侶名は判然としないが、歴代住職の供養塔または墓石の可能性が指摘できる。この地輪の存在から当墓地には歴代住職墓の認められる点が指摘できる。地輪の年代は判然としないが、寛永年間頃と推測される。

7は火輪、空風輪を調査時に組み合わせて復元したが本来の組み合わせと断定することはできない。他の豊島型五輪塔同様に寛永年間頃の造立年代が想定される。

8は砂岩製五輪塔である。部材は散在していたが、形態・法量から一具と判断でき、今回の調査で復元した。水輪については平成26年調査時に採集し、東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要第14号のP16の第2図-9で図面を掲載していた。今回、他の部材が確認されたため、現地に戻して復元した。部材は完存しており、基壇、地輪、水輪、火輪、空風輪が組み立てられている。総高94.5cmである。基壇は高さ10cm、幅27cmで、四隅には簡略化された和泉石系石造物に類例の多い反花が表現されている。地輪は高さ20cm、幅22cmである。正面は3行に渡り銘文が認められ、1行目に「正保二年」、2行目に「妙圓□□□尼」、3行目に「二月十二日」とある。銘文からは正保2年(1645)に没した在家女性の「妙圓」の供養塔(墓塔)であることが指摘できる。水輪は高さ19.5cm、幅25cmである。火輪は高さ15cm、幅25cmで軒の厚さは四隅に向かって増している。空風輪は高さ30cm、幅19cmで空風輪の境に首部は認められない。空輪上端部は明瞭な突起を設けている。種子は各部四方に刻まれており、五輪塔四方門が表現されている。当五輪塔に刻まれている年号は没年のため、造立年については判然としない。ただ、空風輪の形態等から判



写真1 豊島石製ラントウ(9)

断して、没年に近い時期に造立された可能性が指摘できる。当五輪塔から、当墓地が歴代住職のみならず在家による石塔も造立されていたことが指摘できる。

9は凶化していない。豊島石製ラントウで屋根は縦長で大棟を表現していない。龕部には模様が表現されていない。屋根の形態からは17世紀後半～18世紀初頭の年代が推測される(写真1)。

4. 墓地の年代と墓地の構造

以上の各石塔から導き出される墓地の存続期間は、火山石製宝篋印塔の16世紀段階を契機として17世紀代に連綿と造立され、18世紀には終焉することが指摘できる。17世紀の連綿とした造立を勘案して出現期の火山石製宝篋印塔の年代は17世紀に近い時期、16世紀後半頃の可能性が強い。

墓地は南側には簡易な石垣が認められるが、北側には認められない。また、山裾から石塔群の



写真 2 積み重ねられた中世瓦片

テラスまでの傾斜面には中世瓦片が積み重ねられたように露出している箇所があり(写真2)、瓦片を瓦積として再利用している可能性がある。中世瓦片は山裾のみならず石塔を安置しているテラス面にも多数散布している。平成26年調査時では多数の中世瓦片について区画整理により二次的移動を受けたものと推測されたが、墓地にも多数の中世瓦片があり、斜面部に瓦積されているかのような中世瓦片の重なりが認められたことから、墓地の

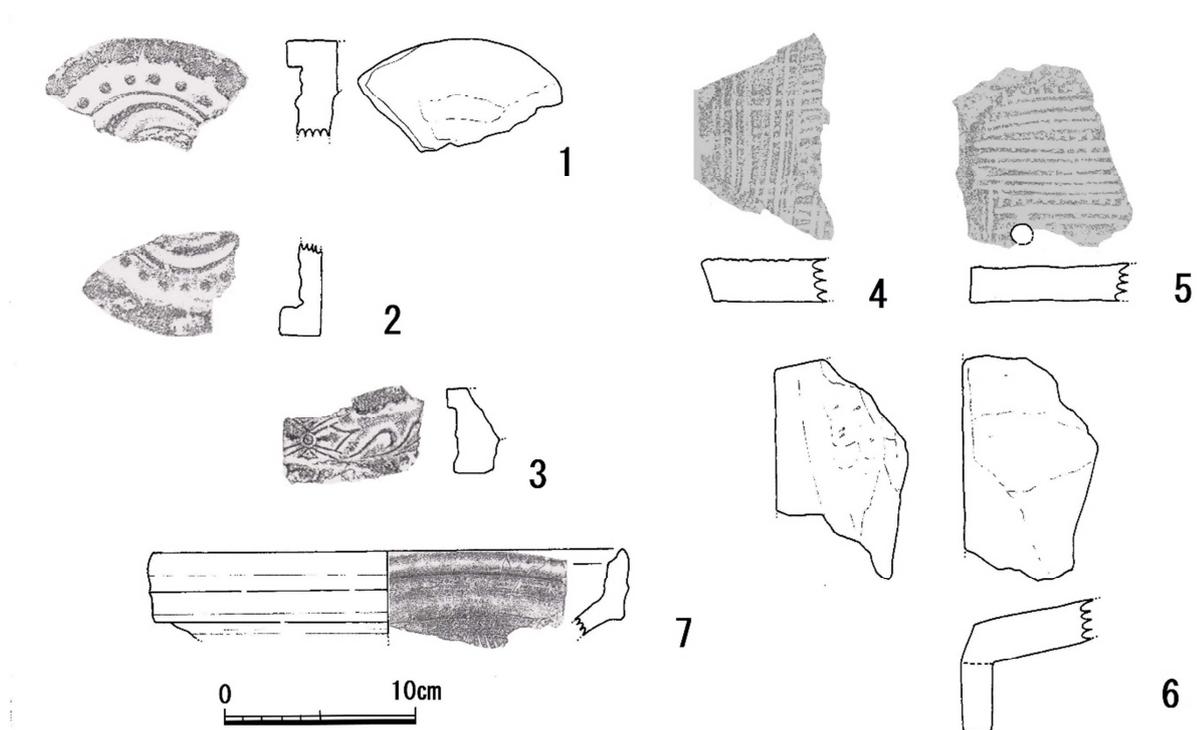
傾斜面等に多量の中世瓦片が再利用されている可能性が指摘できる。詳細は今後の調査の課題としたい。

5. 墓地で採集した遺物について

中世瓦片、土器片については平成26年調査において一定量の遺物を採集し年代的位置づけ等を検討した。今回の調査でも墓地周辺には多量の中世瓦片が散布していたが、採集は軒丸瓦片、軒平瓦片など一部に留めた。この節では採集した中世瓦片、陶器について紹介を行う。採集遺物の実測図は第4図である。

1は軒丸瓦片である。直径15cmに復元できる。色調は黒灰色で文様部には離れ砂が付着している。胎土は精緻である。東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要第12号では軒丸瓦を形態・胎土からA類とB類に分類したが、当例は両方ともに当てはまらない。法量的にはB類に近い。

2は軒丸瓦片である。直径13cmに復元できる。色調は黒灰色で文様部には離れ砂が付着してい



第4図 今回の調査で採集した遺物



1 今回の調査で採集

2 平成26年調査で採集

3 高松市国分寺町新居法華寺

3は高松市教育委員会2017から転載



第5図 円光寺採集軒平瓦と高松市国分寺新居法華寺の軒平瓦の比較

の第3図-18と同範の可能性が大きい。ちなみに、第5図で示すように当文様に類似した文様が高松市国分寺町新居の法華寺所蔵資料で認められる。

4・5は瓦の種類は判然としないが、一面に格子状の線刻が認められ、5には直径約1cmの穿孔が設けられている。この2点の類似例は平成26年調査でも確認しており、東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要第13号のP14の第1図-3に図面を掲載している。

6は屈曲部を有する破片である。瓦の種類は判然としない。屈曲部付近の外面にはケズリ調整痕がみられる。屈曲の角度は鈍角である。

7は備前焼播鉢である。口縁部は上に拡張している。口縁外角はつまみ上げられ口縁部内面は段になっている。口縁部下顎には重ね焼きの痕跡が認められるが、その上下で色調は変わらない。16世紀後半の年代が想定され、墓地に造立された石塔の年代に符合する。

る。分類はA類である。

3は軒平瓦の瓦当面部の破片である。文様は中心飾りとして中央に小円を表現し、その左右に对称にやや反りのある菱文と直線を配置させ、上下には弁を配置させている。文様は東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要第13号で紹介したP32

6. 円光寺における歴代住職墓の展開



写真3 歴代住職墓 A 地点



写真4 歴代住職墓 B 地点

今回の調査によって、中世瓦片の多量に分布する一面が16世紀後半～17世紀後半の歴代住職墓を含む墓地であることが明らかとなった。円光寺において歴代住職及び僧侶の墓は本堂裏と境内南東部の尾根先端部の2ヶ所に認められる(第1図参照)。それぞれA地点、B地点と仮称する。

A地点の墓石では享保8年(1723)から安永6年(1777)までの年号銘が確認できる。A地点で最古と推測される墓石は花崗岩製板碑形墓標(写真5)である。摩滅のため銘文が判読できないが、形態的には17世紀後半が指摘できる。B地点では安永8年(1779)から現在に至る年号銘が確認できる。よって、歴代住職墓は安永年間頃にA地点からB地点に移動したことが指摘できる。そして、今回確認した墓地は17世紀後半まで継続した墓地であることから、A地点の墓地が形成される前の墓地であることが指摘できる。こ



写真5 A地点板碑形墓標

のように、円光寺の歴代住職墓は中世後半から現代にかけて3回の墓地移動を経たことが指摘できる。A地点の開始期である17世紀後半は寺檀制度が整う時期である。この時期を契機として歴代住職墓または近世墓地の成立する事例が香川県各地で認められる。したがって今回調査を実施した墓地も寺檀制度の確立に伴い寺院整備が実施された結果として廃絶された可能性が推測される。

次に墓地の出現期である16世紀後半に注目する。円光寺は中世経典等により、15世紀段階の記録は散見される。中世瓦片もおおよそ15世紀代の瓦であり、15世紀代の円光寺の存在は確実に指摘できる。それに対して16世紀代の状況は判然としない。円光寺及び周辺の墓地等で15世紀段階の石塔は現状で確認できていない。16世紀段階の石塔は西側尾根上の墓地でわずかに五輪塔の残欠が確認できるが、その来歴は判然としない。このように円光寺では15世紀段階の存在が文献・中世瓦片が指摘できるが、この段階の歴代住職墓の候補となるような石塔及び墓地は判明していない。こうした中で16世紀後半に今回の調査地に墓地が形成された。そして、墓地には中世瓦片を瓦積として再利用した可能性が想定された。このような状況からは寺院の再興の動きを考えたい。おそらく16世紀段階は戦乱等により円光寺は衰退をしていた可能性が推測される。16世紀後半となり、生駒家が入封する頃の社会の変革期の中で円光寺は再興され、寺院整備が実施され、西側尾根の斜面部に歴代住職の墓地が形成されたと推測したい。そして、この墓地は歴代住職墓のみならず、歴代住職または円光寺と関わる一族の在家の墓地でもあったことを指摘したい。

おわりに

円光寺周辺では中世瓦が多く散布していることは過去から知られており、平成26年調査では中世瓦の具体的な年代を検討した。結果、中世経典等で円光寺の名の登場する15世紀段階の事例であることが明らかとなった。ただ、この時の調査では西側尾根の山裾に多く散布している要因については言及できなかった。今回の調査では16世紀末～17世紀後半の墓地を散布地の上位で確認し、墓地には瓦積として中世瓦が再利用されている可能性を推測した。そして、16世紀後半に円光寺が再興された可能性を推測した。

今回の調査は清掃等により墓地の実態を明らかにした。そして、清掃によってさらに明らかとなったことは、今回紹介した石塔の他に埋没状態の石塔が認められる点である。このことは、今後、埋没石塔の状況によっては今回の評価を再検討する必要性の生じる可能性も予測される。

円光寺一体は平成26年の東かがわ歴史研究会の調査を踏まえて令和5年(2023)3月に埋蔵文化財包蔵地となった。今後は文化財保護に留意しつつさらなる歴史の解明に努めていきたい。

<参考文献>

大内町史編さん委員会 1985『大内町史』下

大内町 1986『大内町史 資料集』

梶原藍水 1853『讃岐国名勝図会』

高松市教育委員会 2017『史跡讃岐国分尼寺―第 7～14 次確認調査―』高松市埋蔵文化財調査報告書第 183 集

東かがわ歴史研究会 2015「円光寺の中世瓦(1)―軒丸瓦・丸瓦編―」『東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要』第 12 号(平成 26 年度) 東かがわ市歴史民俗資料館

東かがわ歴史研究会 2016「円光寺の中世瓦(2)―軒平瓦・平瓦編―」『東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要』第 13 号(平成 27 年度) 東かがわ市歴史民俗資料館

東かがわ歴史研究会 2017「円光寺の中世瓦(3)―鬼瓦・雁振瓦編―」『東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要』第 14 号(平成 28 年度) 東かがわ市歴史民俗資料館

若王寺所蔵大般若波羅蜜多經調査会編 2007『若王寺所蔵大般若波羅蜜多經調査報告書』東かがわ市歴史民俗資料館叢書 2

東かがわ市歴史民俗資料館 2005『水主神社所蔵大般若波羅蜜多經調査報告諸』東かがわ市歴史民俗資料館叢書 1

誉水村誌編集委員会 1972『誉水村誌』



写真 6 今回調査を実施した墓地(令和 5 年 3 月 11 日撮影)

